

「神様からの約束」

～あなたは約束を受け取る準備ができていますか～

■ 普通や当たり前なこと…

私たちは普通や当たり前が大好きです。しかし、私たちの日常は普通でないことの連続です。そんな中であっても感謝をし続けること、喜んでいることができるようになるために私たちは教会に来て、この一度しかない人生をどのように生きていくのかについて学んでいるのです。神様は天地万物を造ったときから私たちを祝福すると約束してくれました。それには条件があり、私たちは地を支配すること、すなわちコントロールしなさいといわれました。そして今生きている私たちは自はまず、自分自身をコントロールするところから見直していく必要があると感じます。そして私たちは自分をコントロールしていくためには戦う部分があるかと思っています。それは私たちの中にある「癖」に対しての戦いが大きな割合をしめていると思います。私たちの癖もよくよく考えてみると、親から子へと継承されていると感じることがあるかもしれません。また自分の子どもを見る時に同じように感じることもあると思います。しかし親から受けたものがすべて悪い分けではありません。親からの受けた良いものだけを流していくことができます。そのためには私たちの中にある癖と戦い、直していきましょう。

■ 中庸について…

私たちの周りは、「中庸」の精神が基本となっています。中庸とは偏りなく、過不足がなく調和が取れていることを指したり、アリストテレスの倫理学の中で徳の中心となる概念です。極端ではなく中間を発見し、それを選んでいくことをさしています。この日本はこのような考え方が基本となっているように感じます。ですから私たちもこの中庸の考え方の影響を受けています。神様は人を愛し、また最高傑作として創造されました。しかし私たちは周りとの比較する中で育ててくることによって、劣等感が芽生え、神様が非常に良く造られたことを受け入れることができません。最近、繁栄についてメッセージが語られ、繁栄とはどういうものかそして繁栄を受けるにはどのようにするのかについて語られました。今回からは神様から与えられている約束を果たしながら生活することに焦点が変わりました。神様は一人ひとりに違った計画を用意しています。しかしこの日本ではみんな同じようにする教育がなされていくのです。ですから流行も人為的に流行らせているものがある位、みんなと同じようにという考えが浸透しているのです。それが日本人のスタンダード、普通が生まれてきているのです。ですから普通の中にいれば安心を得ることできると考えて行動していくようになるというわけです。聖書の中にも中庸というものがあります。例えば、ローマに税金を納めることは正しいことなのかと質問された時、イエス様はこうに答えています。「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」と。このようにどちらかに偏れば、どちらから批判を受けるような場面で、イエス様はどちらに対しても批判されず、神の栄光となる答えを残しました。このように神のなさことは目に見えたことのないもの、耳に聞いたことのないもの、心に思い浮かんだことのないこととも表現されるように、新しいことです。私たちの中に染み付いてしまった中庸と聖書の伝えている中庸の違いを認識しつつ正しい判断をしていかなければなりません。

■ 徳について…

また徳についても同じように言うことができます。日本の徳という概念は哲学者のアリストテレスが祖となっています。『徳とは卓越性、有能性で、それを所持する人がそのことによって特記されるものです。人間に備わって初めて、徳は善き特質となる。人間にとって徳とは均整のとれた精神の在り方を指すものである。これは天分、社会的経験や道徳的訓練によって獲得し、善き人間の特質となる。徳を備えた人間は他の人間からの信頼や尊敬を獲得しながら、人間関係の構築や組織の運営を進めることができる。徳は人間性を構成する多様な精神要素から成り立っており、気品、意志、温情、理性、忠誠、勇気、名誉、誠実、自信、謙虚、健康、楽天主義などが個々の徳目と位置付けられることができます。』とあります。このような中から、人は自分を高めるために徳というものをを用いるようになりました。到達するところは地位向上による名声になっていきます。まさに本人の努力によって得た自分の栄えある姿です。しかし私たちはこのような人の努力によって得る名声を求めていく道ではないのです。聖書の教える徳とは周り人に対する愛になります。常に私たちは私たちの隣人が少しでも良くなるためにしているのではないかと思います。この歩みの到着点は隣人が神様を見出すようになり、神様が素晴らしいことが分かることです。そのために徳の説明の中で「天分」と表現しているように私たちが神様から与えられた姿に戻り、自分にしかできないことをしていくことが聖書の教える徳なのです。イエス様は徹底的に人に仕えられる姿を通して愛を实践されていきました。私たちの中庸の精神から来る徳の概念を壊すために低いものの家に生まれたり、公生涯の中でも弟子の足を洗うことで表した仕える道として徳を理解しましょう。

■ 私たちはどのように生きていくのか

聖書が教えていることは一人ひとりが「普通」に生きることではありません。普通の中にあって正しい道を見つけ歩みだしていくことなのです。今まで普通と言われていたことも時代が変われば、流行が去れば、

普通でなくなることはしばしば起こります。だからこそ、何が正しいことなのか聞き分けていかなければいけないのです。これを判断するためには自分を見失っている状態ではできません。たとえ99人が違うと言ったとしても隣人を愛するが故にこの道を歩むといえる位しっかりと見つける必要があるのです。聖書から信念を見つけ出し、全うした先人たちがおられるので私たちは今、ここにいるのです。私たちは99匹の羊をおいてでも1匹の失われた羊のために生きていき、100匹の羊を養っていく方法をとらなくてはならないのです。おいていった99匹は減びてよいではありません。預かった100匹を大切に生き方が大事になります。ですから、「中庸」や「徳」を間違っって認識しているとこれをするにはできません。そのために何をしなければいけないのでしょうか。

■ ①キリストを知ること

まず私たちは神様に愛されていることを知しましょう。そして私たちには神様の約束を果たすという道が用意されているのです。私たちに与えられている子どもを大事に育てていると思います。その子どもは大事に愛されることを通して、私たちがどのような人なのかを知るようになります。ですから私たちも神様に愛されていることを知らなければ、神様を知ることにはできません。ですから「キリストを知りましょう。私たちが知ったつもりになっているのは良くありません。しかし私たちはイエス様を知る尽くすことはできません。ですから生涯をかけて知り続けていくことが大切です。ですが、罪責感、恥、劣等感、恥、劣等感を知ることを妨げます。私たちがしなければならぬことがあります。それがこの罪責感、恥、劣等感を自らで取り去る決断が必要なのです。繁栄も貧困も偶然ではありません。私たちがこの罪責感、恥、劣等感の中に生きていけば、貧困がやってきてしまいます。繁栄も貧困も偶然はなく、しっかりと原因があり、必然性なのです。だからこそ、私たちは正しい思いによって自らで決断しなければなりません。神様の前に隠し続けることはできません。必ず、明るみ出される時がくるのです。神様は私たちが約束を果たすからこそ、繁栄を与えて下さるのです。ダビデの慈しみと恵みが私を追ってくるためには約束を守っていきましょう。

■ ②ドゥーロスとして徳に生きる

このドゥーロスとは最下級の僕という意味があります。ドゥーロスとは何をするべきでしょうか。(Ⅱペテ1:5～7) この聖書箇所には書かれていることを行うのがドゥーロスなのです。(ローマ15:1～6) 聖書の中の徳というのは修行や努力によって自分を高めるものではなく、神様の徳に造られた時に与えられた神様からの賜物を用いることによって周りの人を立たせるものなのです。ですから私たちが本物の姿に戻らなければいけないのです。私たちが今、正しいと思っていることには誰かが考えた土台があるのです。しかしその土台となっている考え方が正しくなければ私たちが当たり前に思っていることも正しくないのです。この所の結論として神様の正しさというのは相手のためになる愛であるということなのです。あきらめることも愛ではないし、相手に合わせることも愛ではありません。神様が今日伝えたことは、私たちが本来の姿に戻ることと私たちの周りにいる人も本来の姿へ戻ることが聖書の伝えている徳という生き方なのです。ですから私たちの教会も神様の徳を見出すところとして存在し続けなければいけません。教会とは私たち一人ひとりがそのようにならないければ、建て上げられません。この世の徳は人に栄光が帰ります。聖書の徳は神様を賛美することに帰ります。ここに大きな違いがあります。私たちが源となり、周りの人の徳が高まると誰がすばらしいのかということになるのです。自分に、人が崇められるような結果になるのは間違っています。神様に感謝をする人生を歩んでいきましょう。

■ ③約束に生きる。信仰によって受け取る。

私たちが神様の約束を受け取るためにこれだけは守ると決めたことがあると思います。しかし私たちはしようと思っていることができずに、してはならないことをしてしまう弱さや癖があります。私たちは神様からの約束を受け取るためにこの癖に対して「私は〇〇は守ります！」と克服できると信じて進むことが大切です。私たちの努力ではどうすることもできないかもしれませんが、しかし神様にあってはできるのだという信仰に立たなくてはならないのです。例えば癖は自分で治せると思って努力することは、修行になってしまいう可能性があります。そのために私たちは信仰によって生き周りに人の徳を高める歩みをしていきたいと思っています。ですから今日、自分の努力で行っていく生き方とはお別れしましょう。それを神様の助けを求めつつ行っていくことが大切です。私たちの神のために奮い立つ思いと神様の力によって事を成していくのです。しかしそれを妨害するのが私たちの内側にある悪い癖なのです。ですからこの癖になっている部分で私たちは絶対に果たしますと決断していきましょう。私たちはこの癖の中にいる限り、徳の人生になることはありません。それは神様の約束を得ることではできなくなります。約束を得るために神様の愛の中に立つて、私の弱さを打ち消して私たちは変われると信じて、歩んでいきましょう。